

目標検討分科会における主な議論

1 分科会において概ね合意が得られた事項

- ・ 2050年を最終的な目標年度とし、バイオマス活用により実現すべき社会像をビジョンとして示す。(2050年の数値目標は設定せず)
- ・ 2020年を中期目標とし、2050年の最終目標の達成度合いを評価するための指標を設定し、数値目標を定める。この場合、複数のシナリオを想定し、シナリオ毎に目標設定するものとする。
- ・ ①「環境負荷の少ない持続的な社会の実現」、②「新たな産業創出と農林漁業・農山漁村の活性化」、③「バイオマス利用を軸にした新しいライフスタイルの実現」及び④「国際的な連携の下でのバイオマス活用の推進」の4つの視点から目標を考える。
- ・ これらの目標の達成度を評価する数値目標について、
①については化石資源代替の観点から
②及び③については地域振興の観点から
設定する。
一方、④の視点については、国際的な取組であり、我が国が独自に指標設定することはなじまないことから、数値目標の設定は行わないこととする。
また、①～③の視点を統合する指標の設定は行わない。
- ・ 基本的には国内のバイオマス利用を中心に検討。また、国内のバイオマスとは、バイオマス利用を目的として輸入されるバイオマス以外のバイオマスとする。(輸入パルプで作られた廃棄紙も国内のバイオマスとする。)
- ・ 温暖化対策やエネルギー基本計画、農林水産施策との整合性を図ることとする。

2 その他委員から出された論点

- ・ バイオマス製品の生産量を指標とすると、バイオマスの用途制限に繋がる恐れがあることから、指標として望ましくないのではないか。
- ・ 地域振興の観点を最重視すべきではないか。
- ・ 減量を基本とすべき廃棄物系バイオマスについて、利用量を指標とするのは問題があるのではないか。
- ・ バイオマスの利活用において「価格」と「量」の両者に数値設定することは問題ではないか。
- ・ 営農に係る指標設定は農家への制約となるため、注意すべきではないか。